

「左翼」という価値!?

映画『鬼畜大宴会』と現実の相関性

フィクションという実在

渋谷の街並みが淀んでいた。暗い部屋から出てきたからだけではなかった。頭をハンマーでなぐられたような衝撃を受けたのだ。

映画における暴力や性描写には慣れていると思っていた。しょせんは作り物だろう、なんて考えたのが甘かった。

しかしあの映画を見た後で、ラーメン屋に入ろうなんて言うBは、涼しい顔をして「何かあったの、暗い顔して」だって。人の気も知らずに、こんな時にラーメンなんて食べるかってんだ。

「何かって、君は何も感じないのか？」

僕が切り出すと、無関心にも平気な顔でラーメンを食いながら、「これ、さっきの臓物に似てるね。」

なんて奴だ、吐き気がしてきた…。

実はこれには訳がある。昨日の事だ。珍しくBが「今渋谷で面白い映画をやってる」なんて言うんだ。

きつと奴のことだから、ロードショーにも引つ掛からないようなマイナーな映画なんだろう、とは思いながらも「どんな映画なんだい」と、ついつい切り出してしまった。

その瞬間、しめた！とばかりにBはしゃべりだす。もう誰にも彼を止められない。

奴の性格は知っていた筈だった。無類の饒舌であること、他人の意見を全く聞かないこと、そして何よりも自分が絶対に正しいと思っていること。

おかげで、この映画が「左翼」の映画であり、七〇年代、連合赤軍の“リンチ殺人”を題材に、二十代の若手監督が作った作品であることが、映画を見る前から既に解ってしまっていた。

この前だってそうだ。Bは『スクリーム』だったか知らないが、スリラー映画を一人で見てきて、観るのを楽しみにしていたCを前に、内容をべらべら話すんだ。

その時は笑って頷いていたCも、トイレの前ですれ違った時、涙を浮かべていた。よほど映画の犯人が解った事が辛かったんだろう。

そんな訳で、話を聞いてしまった以上、観る以外に選択肢を失った僕は、半ば強引に、渋谷の待ち合わせ場所へと向かった。

しかし、思ったとおり、Bは来ていなかった。奴が時間通りに来た試しは、一度として無いのだ。

結局三十分以上も待った揚げ句、「電車が遅れちゃって…」などと、わかりきったBの言い訳を聞き流して、僕は映画館へ。

それにしても、よくしゃべる奴だ。「このCMはつまらない」とか「この予告編は出色の出来だ！」なんて、い

ちいち説明してくれるもんだから、回りの人が僕をじろじろ見る。恥ずかしいったらありやしない。

映画本編が始まって、さすがに静かになったが、このままBがしゃべってたらぶん殴ってやろうと、本気で思っていた。

## リアリティーなき現実

さて、映画はあるアパートの一室にある「アジト」が舞台だ。数人の男女が「ある目的」に向け、共同生活をしている。

リーダー格の雅美は、誰かれ構わず自分の欲望の「はけ口」にしながら、郵便局の襲撃やら、武器の調達やらを仲間にやらせている。

獄中に居るカリスマ、相澤の威光のためか、恋人・雅美には、みんな逆らえないのだ。

ものすごく封建的な、上位下達の関係もさることながら、アジト内での討論はいつも希薄で情性的だ。これじゃ仲間意識なんて持てないだろう。

そもそも、いったい何を目指すのかと聞きたくなるような、すさんだ組織には、ほんとウンザリする。せめてもの救いは、ギター好きの素朴な青年・熊谷と、新入りの杉原の交流ぐらいだろう。

そこに、山根という古参のメンバーが現れ、彼なりの粗暴な論理で雅美（と、その背後の相澤）を批判した

ことから、メンバー相互の軋轢が深まっていく。

そして、出所を前にした相澤の孤独な死。こうして組織は解体され、鬼畜の宴へと暴走していく…。

映画の後半はもう、表現することすらおぞましい、狂気の世界だ。

鮮血が飛び散り、内蔵がまきぐられる修羅場の中、ふと隣を見ると、さもおかしそうにBが笑っているではないか。前半のドラマ部分では、いびきさえかきながら、寝ていた奴である。

そして、冒頭の会話。

Bはスプラッター系でも観る感覚なんだろうか。それだったら、わざわざ渋谷まで来なくても、商店外のビデオ屋で『死霊のいけにえ』や『ゾンビ』でも借りてくれば、済むことだろう。

「なぜこの映画が面白いんだ。」と聞くと、「君が杉原みたいだからだよ。」と思ってもみない答えが返ってきた。どうも、映画と僕の反応を観察していたらしい。

## リアリティーというフィクション

杉原といえば、さっきも言ったように、「アジト」の中では新入りで、熊谷の人柄に引かれて組織に結集した男だ。

映画では、役割的にも「傍観者」の杉原なのだが、山根殺害以降の殺伐とした関係性の中で、次第に人格が

崩壊し、信頼していたはずの熊谷をリンチするのだ。

「なんであんな男が僕なんだよ。」と言うと「杉原がなぜ『鬼畜』になったのかを考えなよ。」と言うBの言葉に、僕は考え込んでしまった。

「いいかい、君はね、あるべき現実からこの映画を観て『おぞましい』とか言ってるんだよ。フィクションはフィクション、現実とは現実として考えなきゃ。」

「そうは言っても、題材が題材だけに、『赤軍問題の総括』を主体的に捉え返して…。」

「おいA、何を言ってるのか、話が支離滅裂だぞ。だから君は杉原みたいじゃないか。」ああ、またBの「アレ」が始まってしまった…。

Bは、僕のラーメンが伸びきっているのを、知っているのか、なおもしゃべり続ける。といっても、ラーメンなんて始めから食べる気は無いけどね。

「相澤という絶対的真理の体現者を頂いて、あの組織は成り立っていたわけだよな。相澤が居なくなるってことは、つまり座標軸を失うって事じゃないか。」

ちょうど、スターリンとロシア共産党の関係みたいな依存の構造であろう。Bの鼻息もますます荒くなってくる。

「つまり集団ヒステリーって構造さ。誰もが出口を見失い、パニックに陥っていく。まさに悲劇だね。」声を荒らげるBに、周囲のお客も引きがちなだ。

そして、ハイテンションのBは、なおもしゃべり続ける。「そうした発想が問題なんだよ。杉原も君も、理性的に完全な組織を前提にしているから、現実が歪んだものに見えるんだ。倫理を社会に投射したって、意味が無いだろ。」

まあ、その通りなんだけど、ラーメン屋で何時間も政治談義している、君の感性も相当問題だと思うよ。うん。

そのうち、当然と言えば当然だが、神妙な顔で近づいてきた店員に促されて、僕は店を出た。九月の渋谷の街は淀んだ海のようなだった。僕らは座標軸を失った難破船のように街をさまよっていた。駅はどっちなんだろう。

注…本編はフィクションであり、登場する人物その他は、特別の思い入れこそあれ、すべて想像の産物です。

